
大根一本

カドクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大根一本

【Nコード】

N4753C

【作者名】

カドクラ

【あらすじ】

はつとつこつたんべんです。良ければどうぞ。

「もう10月だっていうのに、今年は暖かいねえ」
60歳を過ぎたお婆さんが、首にかけた手ぬぐいで額からあふれ出る汗を拭う。

例年だったら、夏に過重労働を終えた太陽が少しサボり始めるこの季節。しかし、透き通るような青い空からは、太陽の光がさんさんと降り注ぐ。

太陽の光で色あせた麦藁帽子を被り直し、お婆さんは目の前に広がる畑へと向かう。

30ヘクタールほどの畑は、よく手入れされていて雑草1つ見当たらない。そんな畑には、きっちりと等間隔に大根の葉が顔を出していた。

大根の葉は噴水のような半球体を描いており、季節はずれの太陽を嬉しそうに全身に浴びている。そのおかげで、普段なら肩まで土に埋もれる秋大根が、夏大根のように5cmほど白い肌を露にしている。

そんな大根の中で、一番太く、一番形がよさそうなものを抜き取ると、お婆さんは嬉しそうに家へと向かう。

「見てください、お爺さん。今年の大根は良い出来ですよ」

満面の笑みでそう言うお婆さんの視線の先には、70歳位のお爺さんが布団に横たわっている。お爺さんはゆっくりと起き上がると、お婆さんの持ってきた大根を手取る。

大根に付いた土を袖でふき取ると、お爺さんはおもむろに大根にかぶりつく。

「……農薬を使ったのか」

お爺さんの表情が陰しくなる。

お婆さんはうつむき、答えようとはしなかった。

「確かに、お婆さん1人では大変かもしれない。だが、こんな物を入様に食べさせるわけにはいかない」

「そんなことでは生活ができません」

涙目になりながら、お婆さんは首を振った。

お爺さんは、そんなお婆さんに優しく語り掛ける。

「お婆さんは言った、ワシに命を預けると。そして、ワシは頷いた」
「はい」

「お婆さんの命はワシの命だ。ならば、生活のためとはいえ、農薬なんか使わないでほしい」

お婆さんの肩にそっと手を乗せる。

しかし、お婆さんはそんなお爺さんの手を払いのける。そして、手で顔を覆い泣きじゃくってしまふ。

「もう、あの頃とは違ふんです」

「いいや、違わない」

お爺さんは、強引にお婆さんを抱き寄せる。

「ワシはトメ子を愛している。だから、ワシに命を預けてほしい」

「お、お爺さん……」

お婆さんは決してお爺さんの手を振りほどこうとはしない。顔をお爺さんの胸に押し当てて、溢れる涙を拭っていた。

「今は病魔に侵されている。だから、今は無理かもしれない。だが、ワシはトメ子を守りたい」

お爺さんは、強くお婆さんを抱きしめる。

すると、お婆さんは顔を嬉しそうに赤らめながら、お爺さんを見上げる。

「私の命は、トシヒコさんに預けます」

「ありがとう、トメ子」

「お母さん、なんで泣いてるの？」

息子の声ではっと我に返る。

「なんでもないわよ」

ここはスーパーの野菜売り場。そして今私の手には、一本の太く立派な大根が握られている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4753c/>

大根一本

2010年10月22日13時16分発行